

介護職員における認知症に関する 知識の普及度とその関連要因

大庭 輝* 大阪大学大学院人間科学研究科
数井 裕光 大阪大学大学院医学系研究科精神医学分野
佐藤 眞一 大阪大学大学院人間科学研究科

本研究では、介護職員における認知症に関する知識の普及度を明らかにすると共に、有能感及び動機づけとの関係性について検討することを目的とした。予備調査において、認知症の知識を測定する検査である Professional Knowledge Test (PKT) の設問を修正した。本調査では、関東及び近畿圏内にある介護施設の職員 210 名（女性 150 名、男性 58 名、性別不明 2 名）、平均年齢 42.6 ($SD=13.1$) 歳を対象にした。PKT の平均得点は 28.3 点 ($SD=9.2$) 点であり、得点範囲は 3 - 46 点であった。重回帰分析の結果、正規職員であること、介護福祉士資格を保有していること、認知症に関する自主学習の頻度が多いことが PKT 得点と関連していた。そこで、雇用形態別の多母集団同時分析を行った結果、正規職員は有能感が内発的動機づけを介して PKT に影響を及ぼしており、非正規職員は有能感が自主学習を介して PKT に影響を及ぼしていた。介護職員の有能感を高めるためには、学習機会の提供や職場環境の改善といったトップダウン的な介入だけでなく、職員個々が専門職としての価値を見出し、自らの知識や技能を実践に活用するよう研鑽を積んでいくためのボトムアップ型の実践システムを構築する必要性が示唆された。

キーワード ⇒ 認知症, 知識, 介護職員, 有能感, 動機づけ